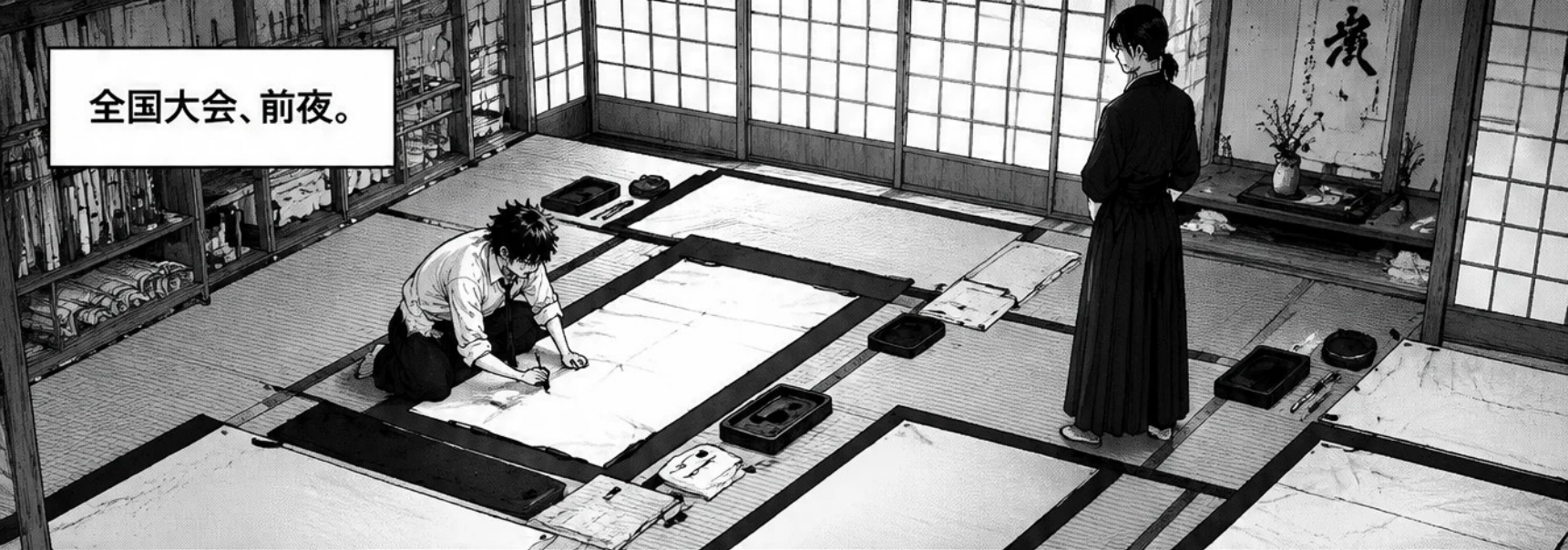


全国大会、前夜。



まだ……
線の芯が
定まらない……！



肩の力が
入りすぎているぞ、
蓮。



あっ——！？

うそだ……
明日本番なのに……！





部長、予備を……！
部の筆を貸してください！



貸さない。



えっ……！？
棄権しろって
ことですか！？



筆の命も
知らぬ者が、
紙に魂を刻めるか。



夜が明けるまでに、
自分の手で結え。



僕の手で……
筆を……！？

午前二時。
静寂が学校を包む。



毛先を揃えて……
余計な縮れを
抜く……。



一筋の乱れが、
線の歪みになる。



竹の厚み……
重み……
握る感触……。



千切れるな……
締め……！



一切の手出しはせず、
ただその眼差しで見守る。



まっすぐ……
芯を通すんだ。



……できた。



指先まで……
この筆のすべてが
伝わってくる。

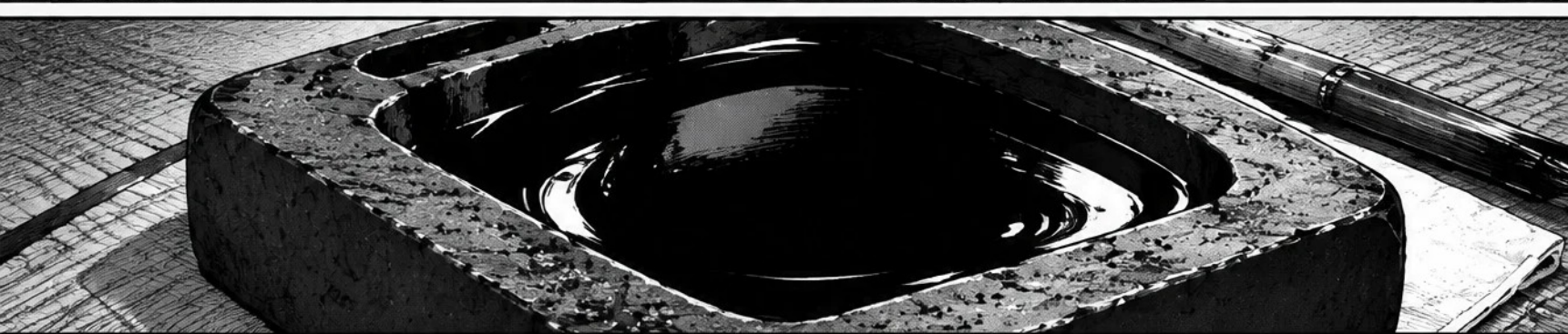
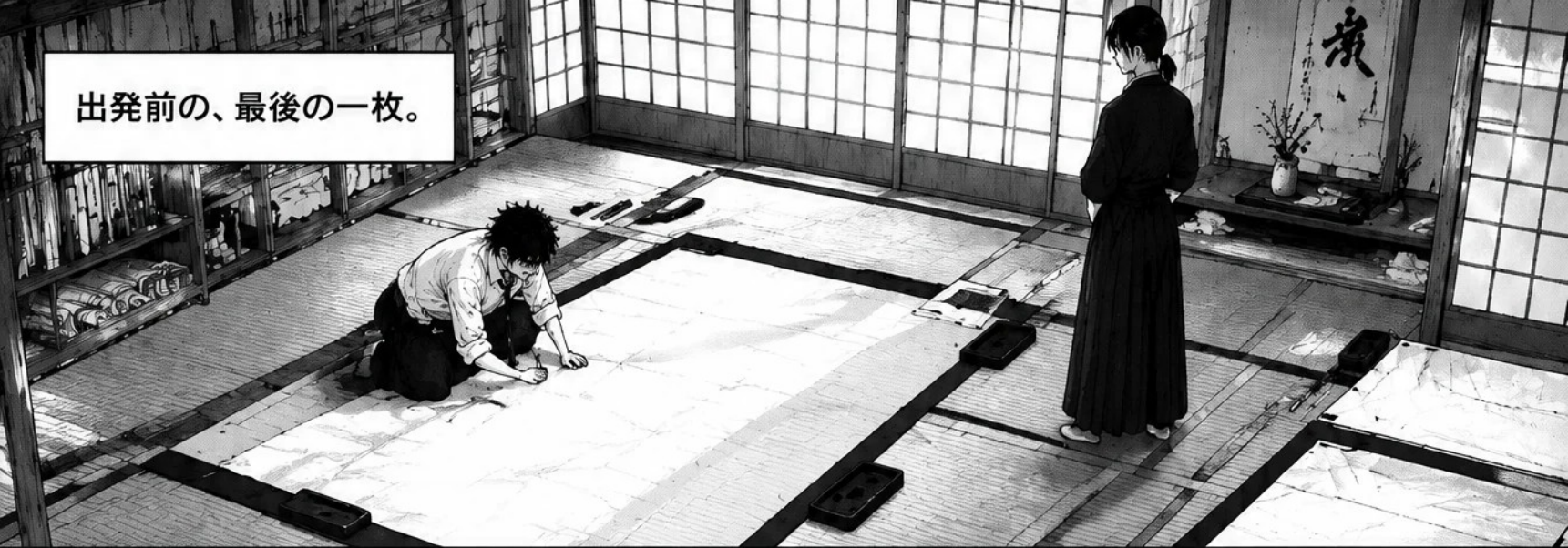


夜が明けたな。



見せてみる。
その筆が持つ、
お前の覚悟を。

出発前の、最後の一枚。



はあああああっ!!



一本の毛すら死んでいない、
生きた線。



折れてくれたから……
出逢えたんだ。



良い筆だ。
お前だけの、
唯一無二の相棒だな。



はい！
全国へ行きましょう！



折れた筆の先に、
真の道が開かれた。

